ろが心掛の宜い女で、妾の様な不容色な女に養子に來て呉るこんな亭主を粗末にしたら、良人罰が當ると云ふので大切にします。又與次平さんもあんな貞淑な女を粗末にしたら、媍罰が當ると大切にしますので夫婦仲も睦間敷何不足無く暮して居りましたが、頃しも十二月の末の事。朝より雪が降り出しましたが日が暮ると雪が酷うなつて來ました。

「ナア、與次平はん。」

「なんや。」

「甚う雪が酷うなつて來た、こないに今夜は冷るよつてに圍爐裏の端で藁なと打なアれ、妾も糸紡をするよつてに。」

「ほんに夫れが宜い。」

と云ふて居ますと表の戸をば(トン／＼)

「お賴み申す……お賴み申す……。」

「ナアこちの人、誰や表を叩いてはるで。」

「何を云ふねん、家の中に居てもこないに冷るのに誰が來るもんか、風が當つて音がして居るのんちや。」

「マア、そうやろうかな……。」

「お賴み申す……。」

「矢張り、叩いてはるがな。」

「ほんに叩いて居る様な……表を叩くのは誰や。」

「ハイ、宿を取損じ、行暮て難澁を致す者一宿な願ひたい。」

「ア、さよか、それは氣の毒やが此の邊は紀州領でなア、前かた旅の人を泊めて間違ひが出來たので村方では旅の者を一切泊めるなとお公布が廻つたあるので泊める事は出來ぬ。此處から牛里程行くとなア、イ、ヤ宿屋やないお庄屋さんや至つて善根深いお方ぢや其處を賴んで泊めて貰ひなされ。」

「夫れは忝なうは存じますが、牛里はさておき一丁も歩み兼る足弱連し旅の空。此の雪に難澁致す者一夜の宿が願ひたい。」

「そら折角やがいかんは。」

「其所を何とぞ曲て。」

「そら曲ても眞直にしてもあかんは。」

「ナアこちの人、今聞いて居ると足弱を連てと云ふてはる、足弱ならお年寄かお女中か子達に違ひ、無い。家に居てもこないに冷るのんや、雪の中は冷いやろ、密と内へ入れて焚火に煖らしたげて煖もつたら出立して上たらどうや。」